

まず、母校である A 学校に 3 週間の教育実習に行くことができ、大変嬉しく思う反面、大学で培った知識や経験を生かし切ることができるだろうかという不安を抱いた。気持ち良い緊張感を持ってスタートを切ることができた。実習生としての目標、個人的な理想像として、子どもたちにたくさんの「想定外」を与える授業作りと、教師が人間であるべき意義について、現場というリアルを目にし、触れ、肌で感じてきたいと決意していた。

実習に挑むにあたって、上記の目標を胸に、実習後は納得のいく答えが見つけれられているよう努めると志した。実習 1 周目は授業見学が中心になった。初日から、「まだ 1 日目」ではなく「3 週間しかない」という意識を持ってどんどん生徒さんの中に入っていき、特にホームルームとクラスの生徒さんとは早い段階で人間関係を作ることができた。

ありがたいことに、担当ではないクラス、学年、高校生の方々にも温かく声をかけていただけ、学校全体にとっても早くとけ込むことができた。1 週目には学園祭もあり、生徒さんのエネルギーに満ち溢れ、そのときに参加することができ嬉しかったのに加え、初めて学校というサポート側を経験し、大きなイベントや行事で事故や怪我なく安全サポートができる裏には、責任を持って指導巡視をしてくださっている先生方をはじめとした関係者の方々の見えない仕事があったからこそだと改めて考えさせられた。2 週目から本格的に授業実践に入っていき、指導案の精度が求められるようになった。元々指導案の作成は得意であったため問題はなかったが、実際「生の現場」でリアルの生徒さんに落とし込めるこのスキルがより重要だと実感した。この実践を通して考えさせられ、悩まされたことは、体育教師としての矜持についてだ。他の教科と異なり、命に関わる一面を持ち合わせている。そのため、生徒に対し、ある程度の主従関係を示すスタイルが求められることは十分理解できる。しかし、大きな声を出したり罰をちらつかせたり、人を統率するために取る手段として、時には抑圧的に支配する精神論に私は賛同しないと決めた実習にもなった。時代とともに教師像も変化しなければならない。これからの体育現場では、実績で統制を取るのではなく、生徒自らが自分たちを統制し合う、主人公になれるような動機付けや環境作りが教員のスキルとして大切になってくると考えさせられた。このことに気づかせ、学ばせてくださった先生方にとっても感謝しております。

メンターとして子供を育てる、伴走するために、この実習では「お」怒らない、「ひ」否定しない、「た」助ける、「し」指示するを実践することができ、実際に生徒さんとのコミュニケーションと 1 人 1 人に適した指導法を見いだす経験ができた。生徒さんに、「先生のおかげで〇〇ができるようになりました」とたくさん言っていただきました。その 1 場面 1 場面こそ、私の一生の財産です。